

ヨルダン南部ジャフル盆地の遊牧化 —四半世紀の調査を振り返って—

藤井 純夫 金沢大学国際文化資源学研究センター特任教授
足立 拓朗 金沢大学歴史言語文化学系教授
上杉 彰紀 金沢大学国際文化資源学研究センター特任准教授
小高 敬寛 金沢大学国際文化資源学研究センター特任准教授

Pastoral Nomadization in the al-Jafr Basin, Southern Jordan: Trajectory of the quarter-century investigations

FUJII, Sumio Specially Appointed Professor, Center for Cultural Resource Studies, Kanazawa University
ADACHI, Takuro Professor, Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University
UESUGI, Akinori Project Associate Professor, Center for Cultural Resource Studies, Kanazawa University
ODAKA, Takahiro Project Associate Professor, Center for Cultural Resource Studies, Kanazawa University

1. はじめに

コロナ禍で散々だった2020年。調査はもちろん、現地に渡航することすら叶わなかった。そこで、この機会に、金沢大学調査団が過去四半世紀にわたって実施してきたヨルダン南部、ジャフル盆地における先史遊牧民遺跡調査の経緯を、初年度からまとめて振り返ってみたい(図1)。調査計画の詳細についてはすでに総括されているので(Nakamura *et al.* 2019; 金沢大学考古学研究室 2019)、ここでは調査当時の様子を交えて手短かに回顧する。

2. カア・アブ・トレイハ遺跡(1997-2002)

ジャフル盆地の調査は、1995年夏の予備調査から始まった。その後、1年の準備期間を挟んで最初に実施したのが、盆地北西部の大型祭祀遺跡、カア・アブ・トレイハ(Qa' Abu Tulayha)の発掘である(図2)。ヨルダン自体に不慣れであったため、ドキドキだった。6次にわたる調査では、初期遊牧民の集団祭祀跡である後期新石器～銅石器時代の矩形連結遺構群と、前期青銅器時代の円形独立遺構群を発掘し、ジャフル編年の大枠を設定することができた(図3)。なお、当時の労働者賃金は1日4ディナール(約700円)で、週末木曜日にまとめて20ディナール札1枚を渡すだけでよかった。近年は、その5倍に高騰している。

3. ワディ・ブルマ遺跡など(2003-2004 春)

その後の2年間は、盆地北西端に位置する後期新石

器時代～前期青銅器時代遊牧民の墓域・聖域の調査に当たった。ハラアト・ブルマ1～2号遺跡(Harrat Burma 1-2)、ワディ・ブルマ南・北遺跡(Wadi Burma South and North)、ハラアト・サアイエ遺跡(Harrat Sayyiyeh)、タラアト・ウバイダ遺跡(Tal'at 'Ubayda)、ワディ・クサイール遺跡(Wadi Qusayr)、ハラアト・ジュハイラ遺跡(Harrat Juhayra)などを発掘し、ジャフル編年の後半部分を補強した。

先史遊牧民の遺跡は総じて小型で、堆積が薄く、遺構・遺物に乏しい。この弱点を補うには、調査件数を増やすほかない。シーズン中に次々と移動しながら調査遺跡を選定して即発掘するという前例のない調査計画を許諾していただいたヨルダン考古局と、移動の忙しなさに対応してくれた調査参加者には、この場を借りてお礼申し上げたい。

4. ワディ・アブ・トレイハ遺跡(2005-2008)

続く2005年からの4年間は、一転して、ジャフル編年前半部分の充実に傾注した。対象となったのが、先土器新石器文化B中・後期の移牧出先集落、ワディ・アブ・トレイハ(Wadi Abu Tulayha)である(図4)。体力・気力ともにピーク時の調査で、それまでの調査成果と併せて、「まるで雲を掴むような話だった遊牧の起源問題を、具体的な遺跡名と正確な年代を伴う実質的な議論へと誘導する」という所期の目標を、達成することができた。

宿舎に泥棒が入ったのも、この時である。裁判では被疑者から逆に名誉毀損で訴えられ、数時間だけとは

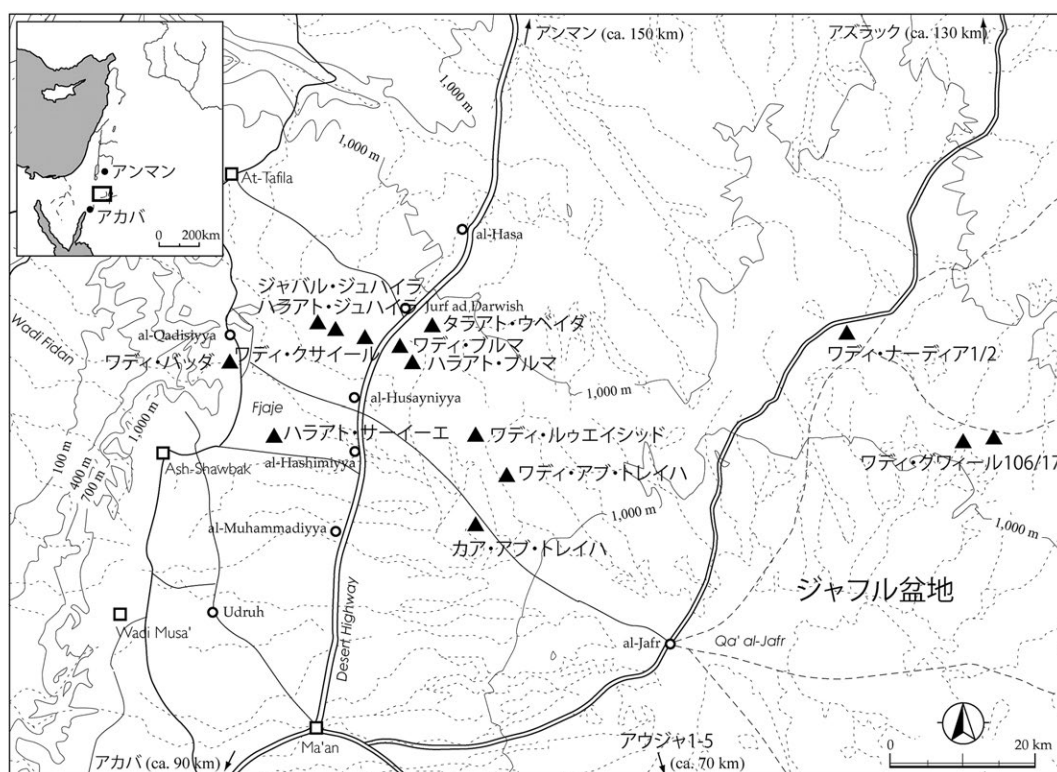


図1 ジャフル盆地における遊牧民遺跡の分布



図2 カア・アブ・トレイハ遺跡 300s 号遺構全景(北から)

言え、国外逃亡防止のため留置所に収監された。まだ若かったのでもんとも思わなかったが、今なら凹んでいただろう。

5. 新石器時代のダム・シスターン遺跡群 (2009-2014)

ワディ・アブ・トレイハ遺跡の発掘では、1)新石器時代の移牧出先集落にはダムやシスターンなどの水利施設が伴っていたが、2)8.2 ka イベントへと向かう乾燥化によってこうした水利施設が機能不全となり、3)その結果、固定的な移牧拠点が放棄されると同時に、遊牧化が始まった、という展望を得ることができた。

では、そうした水利施設はどの程度普遍的なものだったのか。2009年からの6年間は、ワディ・グワイール遺跡(Wadi Ghuwayr)、ワディ・ナーディア1~2号遺跡(Wadi Nuaydiyyah 1-2)(図5)、盆地東部遺跡群(EJS barrage sites)で、新石器時代ダム・シスターンの調査に没頭した。その合間には、後期新石器時代の集落、ハシム・アルファ(Khashm 'Arfa)や、同時代の祭祀遺跡、アウジャ1~5号遺跡('Awja 1-5)、前期青銅器時代遊牧民の大型墓域、トール・グワイール1~3号遺跡(Tor Ghuwayr 1-3)なども調査し、ジャフル編年全体の精緻化に努めた。沙漠の中にテントを張り、寝泊まりしながら調査したのは、この時である(図6)。楽しくてドキドキした。

6. ジャバル・ジュハイラ遺跡(2014夏-2016春)

その後、集落の点在する北西丘陵地に戻って取り組んだのが、先土器新石器文化B後期の岩陰集落、ジャバル・ジュハイラ(Jabal Juhayra)の発掘である(図7)。岩陰を挟って住居にした集落。それだけでも魅力であったが、この遺跡の上層では後期新石器時代初頭の遊牧民キャンプも確認され、遊牧化の経緯を追うための重要な情報を得ることができた。ただし、脆い岩質の岩陰遺跡はもうごめんである。数トンの天井岩が崩れ落ちてきたこともあった。この時のドキドキ

時代	ヒジャーズ (サウジ)	(集落) ジャフル盆地 (ヨルダン) (その他)	ビシュリ (シリア)
先土器 新石器 A 紀元前 9000	?	Harrat Juhayra 205 	Wadi al-Hajana 1
先土器 新石器 B 7000	Wadi Sharma 1	Harrat Juhayra 202 乾燥地出先集落の出現 (移牧の始まり) PPNB 出先集落 Wadi Abu Tulayha Wadi Ghuwayr 17/106 Jabal Juhayra (I. 3)  PPNB ダム・シスターン Wadi Ruweishid ash-Sharqi Wadi Nadiya 1-2 PPNB 石器製作址 JF-0106 etc.	Wadi al-Hajana 1 (I. 1)
後期 新石器 4800	Wadi Ghubayy 11/13	LN 遊牧キャンプ Khashm 'Arfa LN ダムシステム Eastern Jafr sites LN 屋外祭祀址 'Awja 5 Harrat Juhayra Qa' Abu Tulayha (I. 3, north) 'Awja 1 出先集落から遊動キャンプへ (初期遊牧の成立)	Fakat Bidewy 1
銅石器 3700	Wadi Sharma 2 al-Barqa' 1 Umm Qurnayn 1	Jabal Juhayra (I. 2)  Harrat Juhayra 2 屋外祭祀址 Qa' Abu Tulayha (I. 3, south) Harrat Juhayra 1-3 Harrat Burma Harrat Sayyiya 'Awja 3	Fakat Bidewy 2 Jabal Qala'
前期 青銅器 2000 	Wadi Muharraq 1-2 Wadi Ghubai 1-5 Wadi Sharma 6	大型墓域の形成 (遊牧部族社会の成立) ? フリント採掘坑 JF-0210 etc. Wadi Qusayr 173 大型墓域 Tor Ghuwayr 1-3 Wadi Burma North Wadi Burma South Qa' Abu Tulayha (I. 2) Talat 'Ubayda	?
中期 青銅器 1550	?	?	Wadi Hedja 1-4 Tor Tahum 1 Wadi Hayuz 1-2 Wadi Jayratun 1 

図3 ジャフル盆地遊牧民遺跡の編年



図4 ワディ・アブ・トレイハ遺跡全景(南東上空から)



図5 ワディ・ナーディア1号遺跡の1号ダム全景(南東から)



図6 ハシュム・アルファ遺跡のテント(北から)



図7 ジャバル・ジュハイラ遺跡の6号岩陰住居(南東から)

は、しばらく収まらなかった。

7. ハラアト・ジュハイラ遺跡群(2016 夏-)

ハラアト・ジュハイラ1~3号遺跡(Harrat Juhayra 1-3)の発掘は、2014年夏の調査後半から始まり、現在に至っている。その成果については、本誌昨年度号でも報告した(藤井他2020)。3件の遺跡はいずれも銅石器時代後半の祭祀遺跡であるが、2号遺跡には同時代の集落・墓域のみならず(図8)、先土器新石器文化A・Bの小型集落(HJH-205/202)も入れ子になっていた。すぐ近くにはナトゥーフ文化の集落や前期青銅器時代の墓域もあり、遊牧化5000年の過程を一目で見渡すことのできる世界遺産だと力説しているのだが、反響はない。やむなく埋め戻して保存しているが、盗掘は相変わらずである。

8. まとめ

光陰矢の如し。こうして振り返ってみると、あっという間の25年であった。回顧して思うのは、ジャフル盆地の遊牧化に少なくとも3回の波があった、とい



図8 ハラアト・ジュハイラ2号遺跡全景(東上空から)

うことである。最初の波は、先土器新石器時代B中期のワディ・アブ・トレイハから、後期新石器時代のハシュム・アルファへの推移に見ることができる。この期間には、移牧民の乾燥地進出が始まり、やがては乾燥化による移牧拠点の運営放棄とこれに起因する集団の小型化・遊動化が進行した。最初の遊牧化である。第二波は、ハラアト・ジュハイラ2の銅石器時代集落から、前期青銅器時代遊牧民の墓域タラアト・ウバイダへの推移に現れている。この時の遊牧化には、ミルクや羊毛などの家畜二次産品の導入が伴っていたと考えられる。第三波は、前期青銅器時代における大型墓域の形成に象徴される。固定的かつ等質的な大型墓域の形成は、遊牧部族社会の成立を示唆している。

ジャフル盆地と同様の調査は、シリア中部のビシュリ山系(2007~2011年)やサウジアラビア北西部のヒジャーズ地方(2012年~)でも実施している。その成果は本誌を含む随所で発表してきたが、調査件数が多いだけに、未発表のまま温存してきたものもある。コロナ禍の一年をそうした未整理データの分析・統合に当てることができたのは、不幸中の幸いであった。身軽になったところで、来年こそは調査に出たいと願っている。

■参考文献

- ・ Nakamura, S., T. Adachi and M. Abe 2019 Decades in Deserts: A Brief Review of Research Trajectory of Sumio Fujii. In: Nakamura et al. (eds.), *Decades in Deserts: Essays on Near Eastern Archaeology in honour of Sumio Fujii*, 1-21. Tokyo, Rikuchi Syobou.
- ・ 金沢大学考古学研究室 2019「藤井純夫先生研究業績一覧」『金沢大学考古学紀要』40号、5-29頁。
- ・ 藤井純夫・足立拓朗・上杉彰紀 2020「ヨルダン南部ジャフル盆地の遊牧化—ハラアト・ジュハイラ2号遺跡の第6次補足調査(2019年)—」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』125-128頁 日本西アジア考古学会。